

鶴川図書館大好きの会主催「第6回図書館カフェ in 鶴川」記録

2021年1月31日(日)14時~16時15分

鶴川市民センター会議室 オンライン同時開催

会場参加者：SH(多摩市)、YY(薬師台)、TS(大蔵町)、MT(市議)、MS(おやじの会)、HK(鶴川2丁目)、SK(鶴川在住・今後予定のワークショップのファシリテーター)、NU(鶴川5丁目)、藺田碩也(小野路)、鈴木真佐世(金井、司会)

オンライン参加：NY・TY(大蔵町)、KM(鶴川5丁目)、MT(塾経営、鶴川5丁目)、YI(玉川学園)、手嶋孝典(八王子)、守谷信二(小山田桜台)、清水陽子(金森)

会場とオンラインの合計参加者数：18名(以上、世話人以外の参加者の名前は、イニシャルで表記)

1. 挨拶と自己紹介

2. 経過報告-鈴木真佐世より

- ・別紙資料を使って説明があった。
- ・八王子市民センターは司書2名 年間費用は2100万、鶴川図書館は常勤がいるので5500万
- ・鶴川図書館の特徴は、使用頻度が高い、児童書の割合が多い(全体の蔵書数が少ないからでもあるが)、近くに保育園や幼稚園が多く、団体貸し出しが多く、子どもたちに多く利用されている。

3. 質疑・応答・討議

【質問】

藺田：八王子の場合、地区センターの図書室を市の図書館に格上げしていることをご存じか。八王子は2016年から「読書のまち八王子」を掲げて図書館の拡大・充実に努めている。

【討議・意見】

MS：自助・共助・公助…

NY：町田市は多摩地域の中では貸し出し数がトップと聞いた。

KM：今後行われるワークショップのテーマが「鶴川図書館再編後の姿…」となっており、鶴川図書館を今の直営で残してと思っている立場なので、残念に思っている。

SK：ワークショップは、市民の意見を聞ける場にしたいと市から言われている。合意形成は大事。ワークショップなので結論を出すことはしない。当初のアクションプランは通ったが、何らかの形で鶴川図書館は残る方向で。制度的にどう残すのか、事務的にはまだ。市民団体として受けてくれないか、地域の市民団体が自主的に運営してくれるなら…。理想のかたちを出してもらおう。ビジョンをはっきりしておく必要がある。鶴川図書館について、身近な図書館としてどうあればいいのか、地区ごとにあるといいのでは。当日は制度の話は無し。

NU：再編後の鶴川図書館の姿と銘打ったワークショップに参加する人は、廃止に賛成と受け取られるのではないのか。コロナの今だからこそ、図書館が大事。

藺田：ワークショップは本来、方向が決まったものについて細部を練るために行われるものではないか。今回もすでに方針は決まっていて、それを補強するだけではないのか。

SK：いろいろな意見が出る場として作る予定。

藺田：以前も鶴川図書館を巡るワークショップがあったが、市民は利用されただけ、何の改善もなされなかったもので、またかと思ってしまう。配布の資料に市民が運営にかかわる3つのケースが示されているが、現状のままで維持するのは無理だというなら、公立図書館という性格を守りながら、もっと安上が

りにしたいというなら市民が協力する余地がある。市民が運営に参画して現在の半額でできるなら立派な再編ではないか。あくまで公立図書館でやるのが前提だが。

SK：僕の意見では、公共図書館として残す。みんなの図書館(ある基礎的なところは担保して)として残す。

守谷：公立であることにこだわる。公立図書館でなければ、図書館の継続性や公共性(公平性・中立性)は担保できない。新しい本を継続的に収集したり、選書・除籍・提供などに関して中立性、公共性を守って司書がやっている。自治体が責任を持って運営すべきで、直営で、司書資格を持った常勤職員を配置することが必要。市民レベルで運営を担うのは無理。

常勤職員は会計年度任用職員の3倍の賃金。直営が無理なら人件費を抑えたり、「市民協働」がトレンドというならそれも考えるが、公立図書館であるべきだという点は譲れない。資料提供という図書館の本来の機能だけだって、本気でやろうとすれば大変な業務量。市民協働で何か新しい機能を持たせるなどというのは難しい。

図書館は、自分が必要としている特定の本を手に入れるだけでなく、未知の本に出会う、新しい世界と出会う場である。予約本を受け取れる機能があれば十分などということでは決してない。身近なところに公立図書館があるべきだという一点は妥協できない。理想は追うべき。

SK：図書館の理想の共有をしたい。廃止するというのがストップされたわけだから…。博物館に関わってきた。残していくためには…

鈴木：駅前の指定管理者制度導入は、2021年3月に条例改正になるかという段階。教育委員会が、さるびあ図書館と鶴川図書館の廃止は、「アクションプラン」の中で決定しているが、鶴川図書館廃止の条例改正は3月議会にはまだ提出されない模様。議会を通らないと執行はできない。ワークショップをしようとしているときに、条例改正はしないと市が言っている。

TS：SKさんは、再編イコール廃止ではない。公共図書館の形で残して。企業に丸投げはダメ、あくまでも市民でと言っている。

YI：NHKの「100分で名著」で「資本論」について講義をした大阪市立大学大学院准教授の斎藤幸平さんは、図書館は、専門性をもった司書が在勤し、さまざまなジャンルの本を公平に設置するという理由で公共施設として有益だが、予算削減のために司書をおかないなど、システムを縮小しているケースがみうけられる。また、今まで自由に駆け回っていた広場は、テニスコートなど特定のスポーツ施設にし、有料化する。こうした方法が公共性を縮小している」と話されていた。この話に対し、私たちは、市税と使い道と意味を今一度、考えるべきではないかと思う。お茶も飲める市民ボランティア運営の“本がある広場”では、果たして本来の図書館として機能するのだろうか？税金を払ってよかった、平等で満足できるよね…といえるような街にするため、“ユネスコ公共図書館宣言”を、皆で情報共有しましょう！守谷さんの言う理想は、理想でなく、当然の権利を要求しているだけ。ワークショップが、「実施した」という既成事実として使われないように望む。

守谷：図書館を身近にちゃんと作れば、みんなが近くにあってよかったと思い、それが外から人を呼ぶことにもなる。

TY：子どもたちの国語力が低下している。今一番大事なのは図書館を充実させること。公共でなく、公立(市立)図書館であれば、自治体を超えてみんなが使える。学校の生徒も学校図書館だけでは不十分で、地域の図書館を利用できるようにならないと。

MT：市長が図書館を残したほうが良いと考えるには、財政的にwin winの関係を作るのが良い。小規模でも新たなメリットが生まれるようにする。児童書を充実させて、デジタル化を同時に、きれいな図書館にすれば市民の受け皿になる。図書館はコロナの中でもクラスターが起きていない。安心な場として、今の時代だからこそ必要。若い人を呼び込む材料になる。あくまでも希望的観測だが。

手嶋：公立図書館として最低条件が満たされなくてはならない。

鈴木真：ワークショップは一昨日で 15 名くらいの申し込み。定員が 30 名なので、都合のつく人は申し込んでください。

SH：斎藤幸平の本『人新生の資本論』の読書会を行います。みんなで読みましょう。日程など鈴木さんから知らせてください。

以上 記録 HM